

## 【琴路神社の獅子と剣突きについて】

琴路神社の獅子舞が奉納される神幸祭は、毎年11月2日～3日の2日間に行われます。獅子舞は御神輿2基が繰り出す御幸行列の露払いと先導役を務めますが、そのおこりについては確実な記録が無く詳細は明らかではありません。しかし、祭礼神事の歴史や古老の伝承等から、およそ300年以上の伝統を有するものと推定されます。曾ては氏子区内の他の地区が奉仕を担っていましたが、現在南川地区が保存会を組織し同地区の青年を中心として毎年の祭礼を御奉仕頂いております。

祭礼当日の早朝、獅子と剣突きの奉仕者は、昔から定められた神水川(しめご)にて、清水をかけてもらい身を浄め、神前奉納潔斎を行います。その後神社境内でお祓いを受けた後、神前で舞を奉納します。次に周囲の家々を回って災厄祓いを行い、御神輿の出発前には再び神社に戻り神幸行列の先頭に立ち、道中で途中の家々などに立寄りながら演舞を行います。獅子は、「ワーワー」「アババイ、バァウワァイ…」といった掛け声を出し、青獅子(牝)を赤獅子(牡)が追いかけてながら移動します。獅子面を上下にかざしながら演舞がおこなわれ、途中には互いの体を寄せ合い「交合」を想わせる所作もあります。地元では獅子の毛が御守りになるため、演舞の際には人々がこぞって毛を抜こうとしますが、祭礼が盛り上がると獅子も興奮し暴れるので簡単には手に入りません。剣突きは、獅子の演舞が終わりに近づくと同時に、控えていた場所から歩を進め「オー」のかけ声を出しながら円陣を描きつつ所定の位置につきます。その後、互いに歩みより剣の刃を上下で合せたり、相手の柄を打ったりします。

奉納は楽器による囃子が無く演舞者による掛け声だけで進められます。獅子はその動きの度に面に取り付けた鑄物の鈴が奏でる「キャラ、キャラ」と聞こえる音や、剣突きの剣と剣がぶつかり合う「カチン!」という響きが、独特な世界を演出します。また、それぞれの所作は「舞出し」「円座取り」など動作の繰り返しで構成され、除災招福を願う反問(ヘンバイ)的な動きが特徴です。

### ●獅子舞の構成と用具

#### ・獅子 4名

2人立ちの獅子は、赤獅子(牡)と青獅子(牝)の1対です。赤青の装束に白足袋わらじ履きの演舞者は、獅子頭を持ち身布(獅子の毛を渦巻き模様で描いた布)をかぶります。最大の特徴である獅子頭(かつては粘土を下地に和紙を張り重ね、漆を塗り作られていました)は、扁平で直径約70cmのやや楕円形の形状で「面」という表現がぴったりです。表には横に大きく開いた口と大きな鼻、滴型の目、額には身布と同じ渦巻き模様が描かれます。周囲には麻の繊維で付け毛を表現し、内側には鑄物の鈴が下げられています。

#### ・剣突き(剣使い) 2名

烏兜をかぶり天狗面を付けた剣突きは、鼻が長く突き出た赤面が猿田彦、鼻がとがり下に下がっている青面(緑面)が烏天狗とされます。それぞれ手甲・脚絆を付けた赤青の装束に、白足袋わらじ履きで、その名の通り木製の棒の先に扁平な金属の刃を付けた、長さ約1.4mの「剣(鉾)」を持って演舞します。

#### ・獅子釣り1名

御幣と獅子の毛を付けた榊の枝を持ち、獅子と剣突きの移動や、演舞場所の位置決め等を先導する役です。夜間は緑と赤1対の海老が描かれた提灯を持って行う事もあります。

・この他、御供奉仕として宰領1名、交代要員や世話役など15名前後が同行します。

## 付記

琴路神社の獅子舞に類似した芸能は鹿島市内の他、近隣の白石町・嬉野市など佐賀県西南部の有明海沿岸地域に伝承されており、他の地域にはあまり類例がないものとされています。特に獅子面の形状や制作方法には、韓国の仮面劇で使用される獅子頭との共通点も指摘されており、有明海を通じた大陸文化の影響が考えられるとも言われています。

また、獅子舞と共に演じられる剣突きは、松岡神社（鹿島市浜町鎮座）と当神社にのみ伝承されており、この点についても今後の調査・研究が期待されるところです。